

田平遺跡

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第5集

1 9 8 1

宇土市教育委員会

序 文

今般、上綱田町田平におきまして、地区再編農業改善事業の一環として、圃場整備が行なわれることになりました。ところが当該地は古代、網田に条里制が施かれていた場所の周辺に当り、埋蔵文化財の包蔵が予想される箇所でありました。

そこで当教育委員会では、昭和55年度の国と県の補助を受け事前の発掘調査を行ないましたところ、従来本市では未発見でした旧石器時代の遺物を確認するなど大きな成果を収めることが出来ました。

今後、本報告書が、文化財の保護・活用ならびに学術研究の一助ともなれば幸甚です。

最後になりましたが、調査に御協力頂きました地権者の方々、および調査にあられた作業員の方々に対し厚く謝意を表すものであります。

昭和56年3月

宇土市教育委員会

教育長 船 田 至

例 言

1. 本書は、宇土市教育委員会が昭和55年度の国庫補助事業として実施した、田平条里跡確認調査の調査報告書である。
2. 図面上で用いたレベルは海抜標高である。
3. 本遺跡出土の石器分類にあたっては熊本県文化課古森政次氏、また石器の実測・トレースにあたっては城南町教育委員会の豊崎晃一氏の手をわずらわせた記して謝意を表します。
4. 本書掲載の写真は平山修一によるもので、図面のトレースは平山・内田哲朗が行い、実測は調査者全員の手による。
5. 本書の執筆及び編集は平山による。

目 次

第1章 序 説	1
1 はじめに	1
2 遺跡の位置と環境	2
第2章 調査の記録	5
1 1区の調査	5
2 2区の調査	16
第3章 おわりに	18

挿 図 目 次

Fig 1 田平遺跡と周辺の遺跡分布	3
Fig 2 トレンチ配置図	6
Fig 3 トレンチ実測図及び土層断面図 1/100	折込み
Fig 4 1区出土の土器(1)	10
Fig 5 1区出土の土器(2)	11
Fig 6 1区出土の石器(1)	13
Fig 7 1区出土の石器(2)	14
Fig 8 1区出土の石器(3)	15
Fig 9 2区T-4・T-5実測図1/100	17

図 版 目 次

- P L 1 網田平野空中写真1/20,000
- P L 2 (1)田平遺跡遠景 (南から)
(2)1区調査風景
- P L 3 (1)1区N-T・S-T (北から)
(2)1区W-T・E-T (西から)
- P L 4 (1)2区T-1 (東から)
(2)2区T-2 (北から)
- P L 5 (1)2区T-3 (東から)
(2)2区T-4溝・木杭 (西から)
- P L 6 (1)2区T-4及びT-4・N拡検出の木杭列
(2)2区T-6 (東から)
- P L 7 1区出土の土器
- P L 8 1区出土の石器(1)
- P L 9 1区出土の石器(2)
- P L 10 1区出土の石器(3)

第1章 序 説

1. はじめに

昭和54年12月、耕地課から昭和55年度の地区再編農業構造改善事業の一環として、上綱田町田平における土地区画整理、いわゆる圃場整備を実施するとの話が、教育委員会にもち上がった。しかしこの地域は古代条里制が施かれていた区域の周辺部にあたり、埋蔵文化財の包蔵が十分予想される個所である。そこで工事は、教育委員会の発掘調査結果をみた上で施工するとの結論に至った。

土地区画整理の範囲は約17万㎡と膨大な面積であり、しかも工事区域のほとんどが水田のため、調査は困難をさわめた。その結果、古代条里に関する遺構・遺物の検出はできなかったが、周辺の微高地からは各時期の遺物が少量ではあるが出土した。

今回の調査にあたり、耕地課をはじめ地元田平地区のみなさんには多大なる協力を得たことに対し、感謝の意を表したい。

調査関係者

宇土市教育委員会

教 育 長	船 田 至			
社会教育課長	久 森 庸 助			
文化係長	一 宗 雄			
庶務担当	内 田 憲 子	高 木 恭 二		
発掘担当	平 山 修 一	木 下 洋 介		
調査補助員 (以下敬称略)	浦 田 信 智	山 神 孝 弘	内 田 哲 朗	
	白 石 徹	宮 川 栄 助	八 木 稔	
	吉 本 恵 子	田 端 幸 代		
調査協力者	浦 本 ト メ	梅 田 ハルエ	山 本 ス ミ	
	藤 本 茂 子	山 本 保 子	堀 内 幸 子	
	堤 キミ子	村 崎 ミスエ	梅 田 亀太郎	

2. 遺跡の位置と環境

田平遺跡は、市の中心部から南西約10kmを測る宇土半島北岸に展開する網田平野東端の標高約5mの微高地上に位置する。そもそも宇土半島北岸は、主峰大岳から派生する丘陵が海岸まで迫り平野部に恵まれず、網田に開けた平野が、唯一の平野部といえる。網田平野は、大岳山塊に源を発し有明海に注ぐ網田川沿いに発達した扇状地であるため、平野のほぼ中心部付近までの水田下には砂利の堆積がみられる。しかし国道57号線以西は新しい時期になってから陸化したと考えられ、付近の水田は湿田の様相を呈している。

網田平野及び周辺における遺跡の分布は、別図に示すように、ほとんどが古墳時代のもので、わずかに県立宇土高校に所蔵されている太型蛤刃石斧が古墳時代を遡る唯一の遺物である。しかしこの石斧は従来網田町小舟採集といわれているだけで、その正確な出土地については不明であった。

つぎに古墳時代になれば、大岳山塊から延びて網田平野を面する塩屋丘陵上に数基の円墳が構築される。この中で注目されるのは、城2号墳¹⁵¹⁾で、内部主体に堅穴系横口式石室を有し、副葬品に九州では稀有な遺物である琴柱形石製品を出土した。また1号墳¹⁵²⁾は、2号墳の南西約100mに築かれ、内部主体は肥後タイプと呼ばれるコ字型屍床を配した横穴式石室である。さらに塩屋丘陵の南西、つまりこの丘陵が国道57号線と、国鉄三角線によって掘り切られた付近にマブシ古墳群¹⁵³⁾が存在する。ここでは市民グラウンド造成中に大型の箱式石棺と、堅穴式石室の石積を踏襲した石棺が出土し、箱式石棺には鉄鏃3本と、刀子1本が副葬されていた。なおこの他、城古墳の周囲及びマブシ古墳群周辺には数基の箱式石棺がみられる。

古代に至ってこの平野部には、今回調査のきっかけとなった桑里制地割¹⁵⁴⁾が施かれる。これは、応永11年(1404)の郡浦庄地検帳によれば、33坪を除き1から36までの坪名がそろってみられる。

中世には、塩屋丘陵上に宇土城跡(西岡)¹⁵⁵⁾の支城である田平城が構えられるが、築城者については記録に乏しく不明である。現在でも付近には城の名残を留める地名がある。

以上のように網田平野は、宇土半島北岸における唯一の平野という優位性から人々の足跡が古くから刻みこまれている。これは平野が扇状地であるために水利、水捌けに恵まれ、可耕地としては利用しやすかったことと、それに網田川河口の港が海上交通の要衝として控えているなど、地の利に恵まれていることなどが上げられる。

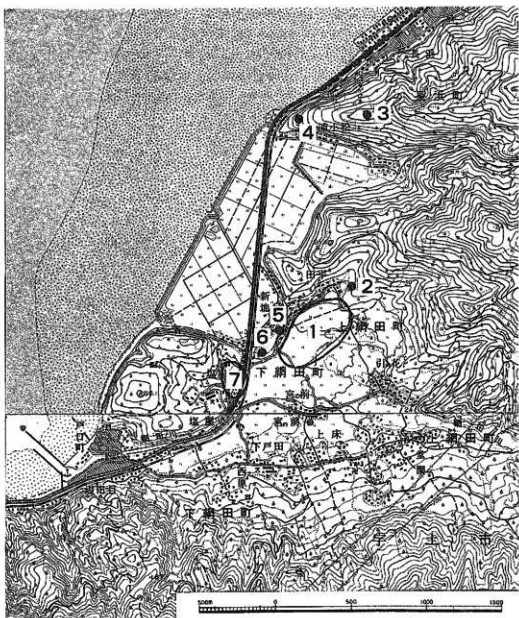


Fig 1 田平遺跡と周辺の遺跡分布

- | | |
|----------|-----------|
| 1. 田平遺跡 | 5. 城2号墳 |
| 2. ヤンボシ塚 | 6. 城1号墳 |
| 3. 小松古墳 | 7. マブシ古墳群 |
| 4. 小松2号墳 | |

- 註(1) 城2号墳発掘調査団・宇土市教育委員会『城2号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集、1981
- (2) 富樫和二郎「網田古墳群」宇土市の文化財第3集、1977
- (3) 富樫和二郎・卯野本諒二「宇土市下網田町マブシ出土の石棺」宇土半島自然と文化、1975
- (4) 熊本県教育委員会『熊本県の系図』熊本県文化財調査報告書第25集、1977
- (5) 熊本県教育委員会『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告書第30集、1978

第2章 調査の記録

1. 1区の調査

(1) 1区の概要

第1区は背後の丘陵から舌状に延びる微高地の端部に位置し、標高約5mを測り、下段の水田面とは1mほどの比高差をもつ。この付近は、発掘前の踏査で黒曜石片が採集された箇所でもあり、発掘による遺構の検出が予想された。

調査は、磁北に一致させて幅2m、長さ18mのトレンチを入れ、さらにこのトレンチの中央に直行して、もう一本のトレンチを設定した。そしてこれらのトレンチの交差する中央部から延びる各区をそれぞれの方位に合わせ、N-T・S-T・E-T・W-Tとした。その結果、遺構の検出はなかったものの、遺物の包含を確認した。なおN-T・S-Tにおいてピット状のものがみられるが、遺構に伴うものではなく、単なる浅い窪みで人為的なものではない。

(2) 土層

1区の層序については、Fig 3に示すとおりである。まず1層目の耕作土層が15cm前後みられ、以下W-Tでは5層目まで確認できる。しかしE-T端においては、15cmほどの耕作土の下に2層目の黄褐色土が約5cmほどあり、その下はすぐ地山になっている。地山はE-T端で標高5.10mほどであるが、W-T端まで同4.65mで両端での比高差が55cmほどあり、西に行くに従って漸次下がっている。なお2～5層目までは河原石状の小礫を含み、特にこれは、4層目の茶褐色土において多くみられる。また遺物は2層目の黄褐色土と、3層目の褐色土から集中して検出され、4層目以下については、ほとんど皆無といつてよい。これら遺物は2次的な堆積で、大半はW-Tからの出土であり、地山面の傾斜からしても当然のことである。なお土器の表面には摩滅がみられ、しかも土器層序的な出土ではないことから前述のことが首肯されよう。



FIG 2 トレンチ配置図 (一点線は圃場整備範囲)

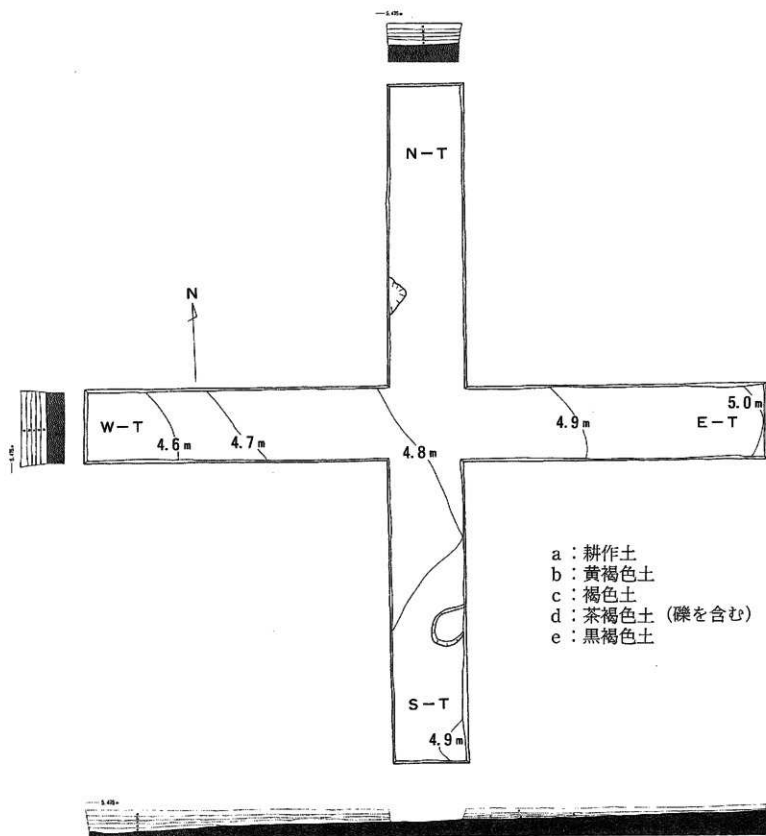


Fig 3 トレンチ実測図及び土層断面図 1/100

(3) 出土遺物

本調査区出土の遺物は、遺構に伴うものではなく、すべてが他からの流れ込みによる二次堆積での出土である。これらは時期的には縄文時代から中世に致るまでのものである。土器は流れ込みにより、表面が摩滅を受けたものが多く、しかも出土量としては多くはない。しかし石器は発掘面積のわりには出土量が多く、フレーク・チップまで加えると約300点の出土をみた。

土器 (Fig 4・5, PL7)

土器はすべて細片であり、全体をうかがい知れるものは一つもない。しかも表面が摩滅し、製作時における調整などに不明な点が多い。

1～14までは縄文式土器で、1・2・3・4・6・8は茶褐色または黒褐色を呈する厚手の土器で、口縁部外面に凹線文または押点文を描き、広義の阿高系式土器で南福寺・出水式の土器である。5・7・9は後期の土器で、沈線文の中に摩消縄文を配する土器である。5は黒褐色、7は淡褐色、9は褐色を呈し、いずれも焼成はよい。また5・7には外面に一部赤色顔料が付着している。10～14はいずれも後期末～晩期にかけての一群の土器であるが、10・11は外反する口縁部をもち、10の外面には条線を有する。11は黒褐色でよく研磨されているが、10は粗製の土器である。12～13は黒褐色または褐色を呈し、内外面ともヘラによる研磨を行っており、口縁外面には沈線をめぐらす。なにしろこれらは小片であるために口縁の怪など不明である。

15～20は弥生式土器で、15～18はいずれも口縁部が内傾する甕形土器である。15・17は口縁部や、口縁部下の突唇部に刻み目を有する。19はこれら甕形土器の底部である。20は免田式長頸壺の胴部屈曲部片で、このタイプに通例みられる、重弧文を上半分に描く。

21・22は南宋の白磁碗であるが、小片のため全体をうかがい知ることはいできない。21の口縁は小さな玉縁を呈し、22はこの底部にあたるもので、体部外面はヘラ削り調整を行ない、底部も削り出しによる低い高台をもつ。共に釉は乳白色であるが、22の外面は露胎になっている。胎土は21・22とも灰白色でやや軟調。23は瓦質のスリパチで、胎土は灰白色、焼成ともに軟調である。内面には5本を単位とする櫛目が施されている。24は外面に唐草文を配する染付の皿で、21・22の白磁碗より時期の下がる16世紀明代の所産である。この他、細片で図示できなかったが、龍泉窯系の青磁片も少量出土している。

このように土器片は、縄文時代から中世まで各時期のものが出土しているが、古墳時代の土器が少ない。しかしながら皆無というわけではなく、実測できるような大きさでないため図には掲げなかった。

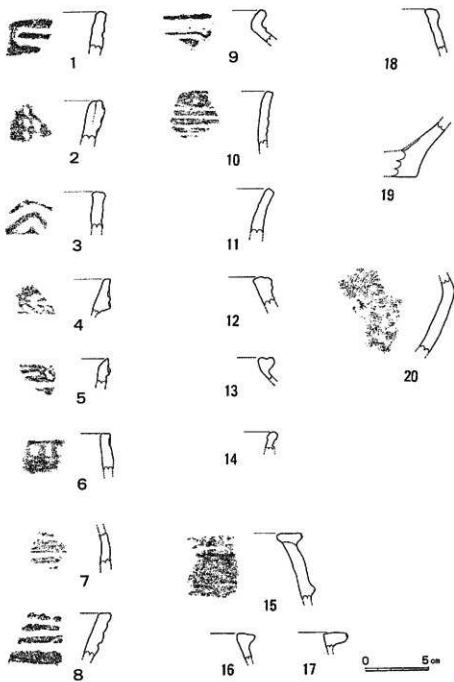


Fig 4 1区出土の土器(1)

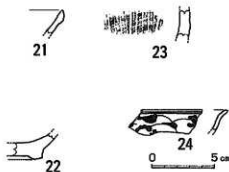


Fig 5 1区出土の土器(2)

石器 (Fig 6～8・PL 8～10)

石器も土器と同様二次堆積によるもので、その所属する時期は不明であるが、共存した出土土器から、そのほとんどが縄文時代の石器である。出土層位は土器と同様第2～3層目に集中して検出したが、特に第3層目からの出土が多く、しかも地山が傾斜して低くなるW-Tから数多く出土した。また出土した石器は剥片・コア・チップも含めた数量は総数で293点を数え、その中でクサビ形石器が85点と多くを占める。293点の中で3点だけであるが旧石器が出土している。

石鏃 (1～11) 1区からは欠損品も含め総数で12点の出土をみる。この中で1～10は全面にわたり細かい二次加工を行ない、横断面は凸レンズ状を呈するもので、縄文時代に普遍的にみられるタイプである。11は剥片の石鏃で表裏両面には製作時における剝離面をそのまま残し、まわりにのみ二次加工を施す。これらの石鏃は基部が抉入するものと、まっすぐな、いわゆる三角鏃がある。また7のように細身を呈するものもある。石材は1～6までが黒曜石、7がチャート、8～11が安山岩製である。

楔形石器 (12～16) ここでは主なものを図示したが、1区からだけでも楔形石器は85点と多量に出土している。これらの石器は使用時における上下からの圧力で、両端に小剝離が認められるものもある。16は尖頭器状をなすが、ここでは楔形石器として分類した。12・13が黒曜石で、14～16は安山岩製である。

楔形石形のスボール (17～21) 楔形石器の使用時に生じる欠損品であるため、ほとんどが上下からの圧力によって縦長に剝離している。21は安山岩製であるが、他4点は黒曜石である。

スクレーパー (23・24) 23は横型の石鏃と考えられるもので、つまみ部分が欠損する。また24はスクレーパーとしたが、楔形石器の可能性もある。上面と側面一部に自然面を残す。石材はすべて安山岩製である。

二次加工のある剥片 (27～30) 剥片に二次加工を施しているため、形状は定形化してい

るものではない。27は三角形を呈するもので、片面にはそのまま主要剥離面を残し、2辺を刃部として用いている。28は母指状を呈するもので、周囲には両面から調整を施し、刃部とする。スクレーパーとも思われる。29は、両サイドに二次加工による刃部をもつ。30はV字形をなすもので一部に自然面を残し、2面には細かい調整による刃部がみられる。石材はオリーブ色を呈するチャートである。

コア (31~35)

ここでは5点示したが、図示したように出土したものすべて小形のものが多い。石材は31~33が黒曜石、35が安山岩である。

旧石器 (22・25・26)

約300点の中で2点の旧石器が出土した。しかし2点とも小片であり全体の形状は不明である。22は両側面に二次加工を施し刃部をつくり出す。25はナイフ形石器の基部で側面に片面加工による刃部をもつ。22・25は安山岩製で全体に風化が著しい。26は黒曜石製のスクレーパーである。一部に自然面を残し、2面に両面加工による刃部を作り出す。

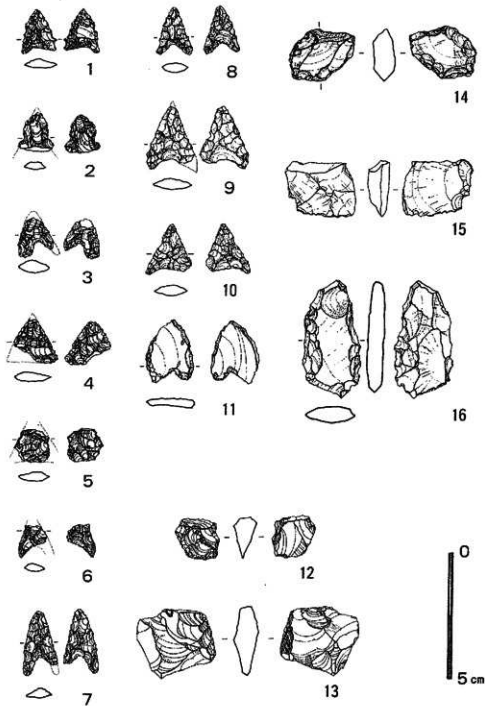


Fig 6 1区出土の石器

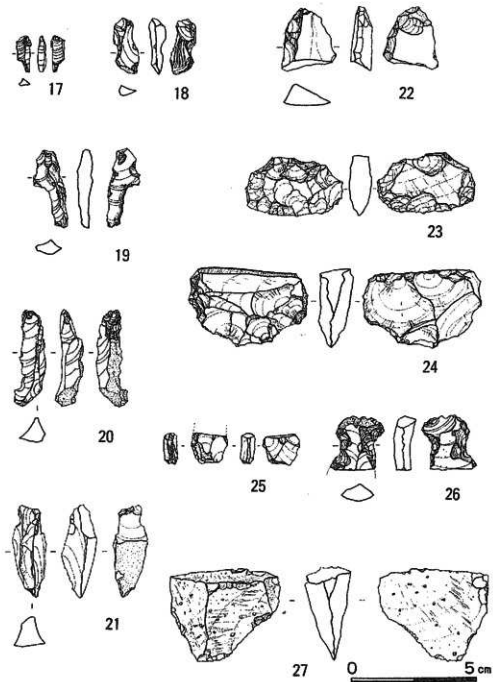


Fig 7 1区出土の石器

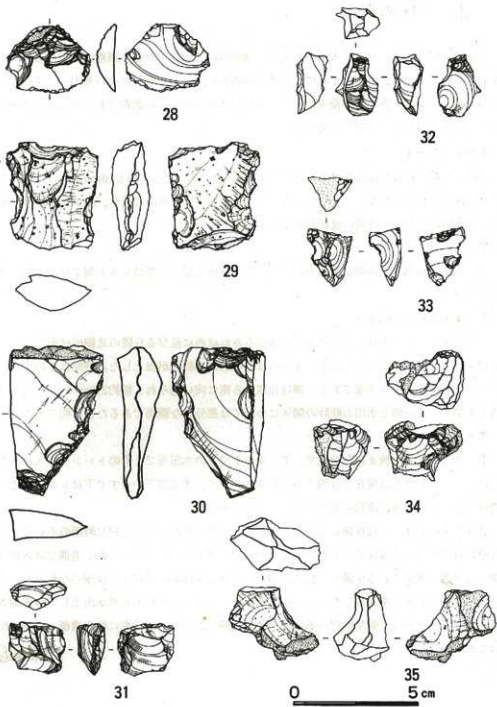


Fig 8 1区出土の石器

2. 2区の調査

2区は1区の北東、つまり大岳から延びる微高地の北辺にあたる。調査は4地点にトレンチを設定し行なったが、水田とそれに微高地上の調査地点とも、例年にない多雨と、すぐ脇を小川が流れ、トレンチ内に水が溜るために、水に悩まされながらの調査であった。調査結果については、以下各トレンチごとに述べる。

T-1・T-2

2区の北端にある残丘状を呈する独立丘陵上に幅1.5m、長さ8mと10mのトレンチ2本を直して設定し調査を行なった。しかし表土層から一層を挟み地山に至り、遺構の検出はなかった。表土層から新しい時代の遺物が少量出土。

T-3

T-1・2の南、水田中に東西方向に入れた。耕作土層の下層はシルト層になり遺構、遺物の検出はなかった。

T-4・T-5 (Fig 9)

この2本のトレンチは、調査対象区全体からみれば西に延びる丘陵の北側地縁部にあたる微高地にあたる。東西に入れたT-4からは分水溝と木杭例が出土した。時期はこの溝から出土した土器から近世の所産である。溝は北東から南に向い掘られ、幅約2.0mほどで深さ0.3mほどを測る。この溝と水田の畦畔の関係については部分的な調査であるため不明である。

T-6・T-7

T-3とT-6に挟まれた地点で、T-4の1段下の水田面で2本のトレンチを入れ調査を行なった。この地点は現在では畑であるが湧水が多く、表土層下からすぐ下はシルト層で、遺構はなく、ごく少量の遺物の出土があったのみである。

2区も1区同様、二次堆積による少量の遺物を出土したが、1区と同じ時期のもので、しかも原位置での出土ではなく、土器も小片であるため図示しなかった。しかし遺構では近世の時期の分水溝と考えられる小溝と、杭例を調査したが、全体的な把握までは至らなかった。当初この地区にトレンチを設定したのに、小舟出土といわれる大型給刃石斧が出土している地点の近くであることから、弥生時代の遺構の検出を期待したが、この時期に伴う遺構・遺物の出土はなかった。

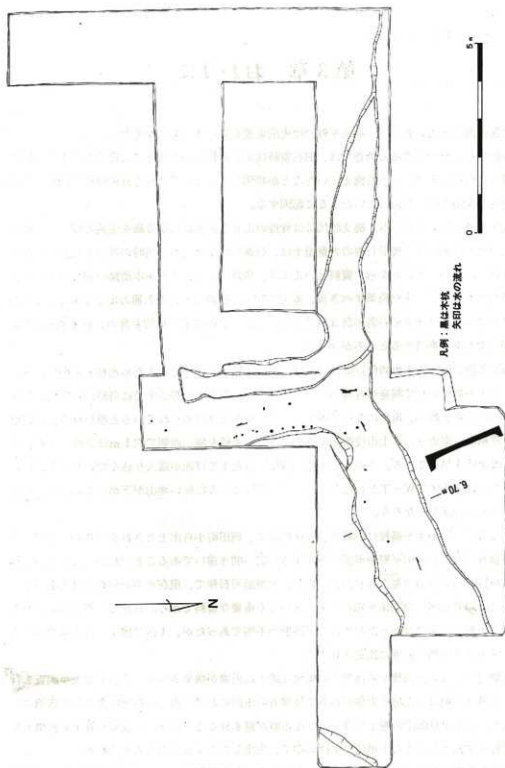


Fig 9 2区T-4・T-5実測図 (1/100)

第3章 おわりに

最後に調査結果の要約と、網田平野の歴史的要因を述べまとめにかえたい。

今回行なった平野遺跡の調査では、旧石器時代から近世にいたるまでの遺物が出土し、同じ地域に各時代の人々が生活を構えていたことが判明した。これはそれぞれの時代に即した地理的条件を網田平野が具備していたことに起因する。

採集社会といえる旧石器・縄文時代には背後の山々と前面に広がる海を生活の糧とし、特に縄文時代後晩期に伴う楔形石器の大量出土は、石鏃の出土と合わせ当時の社会が狩猟に依存する度合いの高かったことを示す資料といえよう。換言すれば、これが本遺跡の縄文時代における特色ともいえる。また特筆すべきは、本市で初めて確認された旧石器の出土である。これはスクレイパーとナイフ形石器の計3点である。これらは縄文期の遺物も含め、将来原位置での層序的な把握に期待するところが大きい。

稲作農耕が始まる弥生時代以降になれば、この地域が扇状地であるため水利・水捌けに恵まれ、水田可耕地として開発が容易であった。しかし、現在の平野がすでに当時から陸化していたものとは考え難く、後世になって陸化した部分がかなり占められていると思われる。現在塩屋丘陵裾から南走し、宇土市役所網田支所に通じる道路を境に西側で約1mほど低くなり、水田は渾田状を呈している。このことから一時期、付近まで汀線が這入り込んでいたと考えられる。さらに第1区でW-Tとしたトレンチで、西側になるに従い地山が下がっていることも上述したことの証左となろう。

ところで、以前宇土高校に所蔵された採集品で、網田町小舟出土とされる石斧があるが、今回の調査で小舟は網田平野最奥部に所在する小宗の聞き違いであることがわかった。石斧は福岡市西区今宿の今山で製作された玄武岩製の太型給刃石斧で、現在までの分布では南限にあたり、当時の北九州との関係を知るうえにおいても重要な資料である。しかし石斧が採集された当時、土器が一緒になかったためにその時期が不明であったが、1区で出土した土器片からみて、弥生時代中期の前半に比定されよう。

古墳時代には大岳山塊から派生する塩屋丘陵上に円墳が構築される。この中で先年調査を行なった城2号墳は、立地その他からみて被葬者の生前における海への指向性を示した古墳といえよう。宇土半島海岸の岬上には、小さな古墳が営まれることが多く、塩屋丘陵上の古墳も網田平野を掌握するような小単位な集団の中で、突出した人々のものと考えられる。

その後古代になれば、今回調査のきっかけとなった条里制が、この平野に施される。「肥後

郡浦庄応永11年地検帳^{註1)}によると、網田には33を除き1から36までの坪付地名がみられる。しかし発掘前に行なった聞き取りでは、これらの地名は現在みられない。先に『熊本県の条里^{註15)}』で牧野洋一氏が想定している網田里は、地割方向をN14°Wにとり、条里北東隅を今回行なった工事範圍の西側部分にあてている。けれどもこの部分は現在湿地状となっているため、調査は不可能であった。そこで条里の復元を現在の地形に照らし合わせて行なえば、第1区の調査区付近を境にして、平野の南側部分に想定できよう。

さらに中世になれば、網田平野の東を画する塩屋丘陵上に田平城^{註16)}が築かれる。田平城に関しては文献史料を欠くため、築城の年代等は不明である。田平城は宇土城(名和氏の居城)の支城としての役目を果たしており、この付近が中世要害の地として重要であったことを示すものである。

以上のように網田の地は古くから人々の生活の跡がみられるが、これは宇土半島北岸における地理的優位性が第一に上げられよう。宇土半島北岸を横断する道路は、明治20年に三角西港の開港に伴い開通したもので、それまでは海上交通に委ねることが多かった。このようなことから、網田は近代の初期まで、有明海沿岸において海上交通上重要な位置を占めていたといえる。

- 註1) 永青文庫蔵の『天草海辺絵図』によると、網田は海が湾入して描かれていることから、近世までは明らかに海であった。
- (2) 福岡市教育委員会『今山遺跡(1)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集、1973
- (3) 城2号墳発掘調査団・宇土市教育委員会『城2号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集、1981
- (4) 阿蘇家文書之1 大日本古文書 家わけ13 『肥後郡浦応永11年地検帳』
- (5) 熊本県教育委員会『熊本県の条里』熊本県文化財調査報告書第25集、1977
- (6) 熊本県教育委員会『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告書第30集、1978
- (7) 中島亀喜『網田村郷土誌』、1958

PLATES



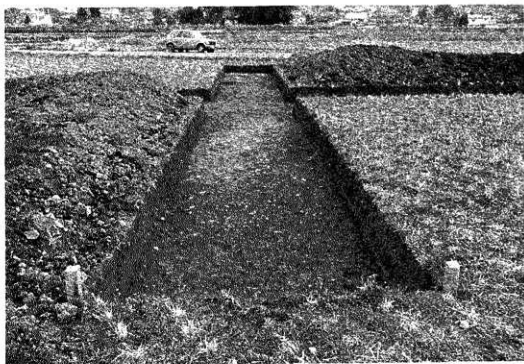
網出平野空中写真 (1/20,000)



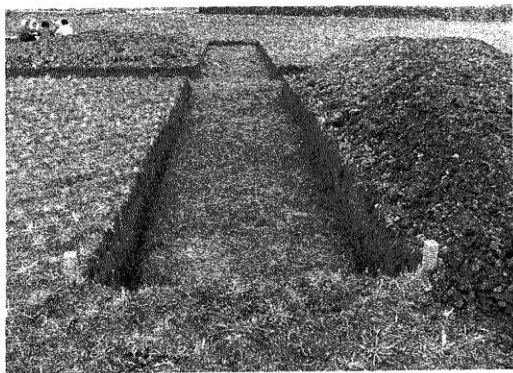
(1) 田平遺跡遺景 (南から)



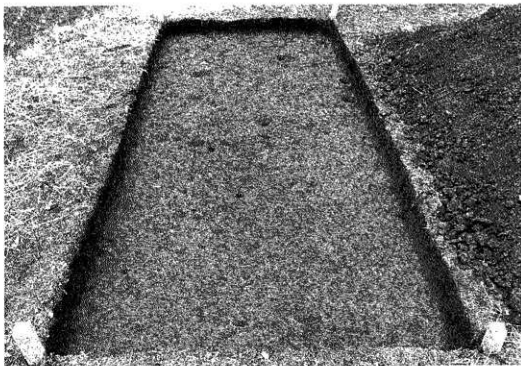
(2) 1区 調査風景



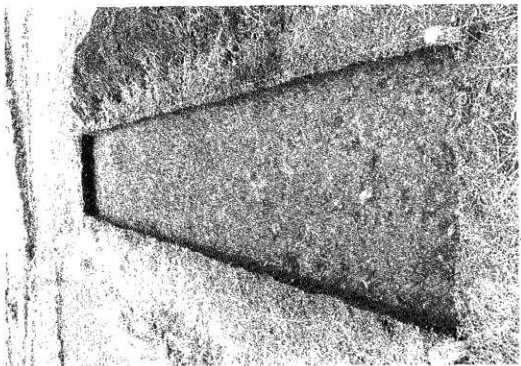
(1) 1区 N-T・S-T (北から)



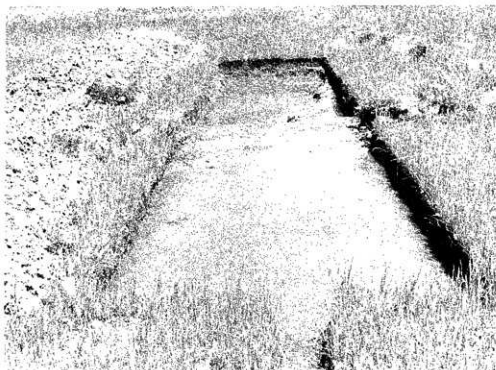
(2) 1区 W-T・E-T (西から)



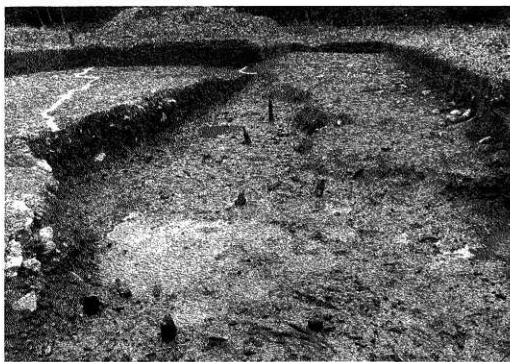
(1) 2区 T-1 (東から)



(2) 2区 T-2 (北から)



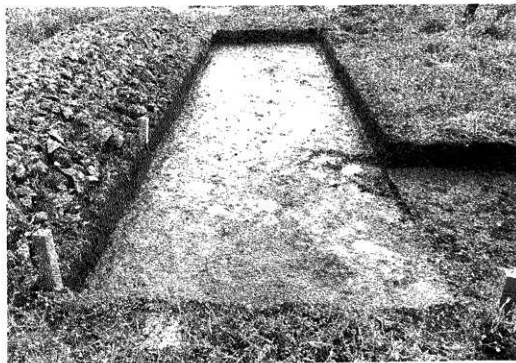
(1) 2区 T-3 (東から)



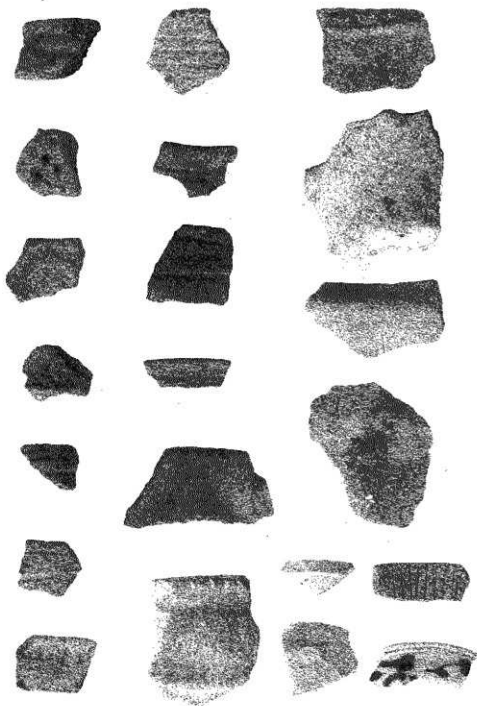
(2) 2区 T-4溝・木杭 (西から)



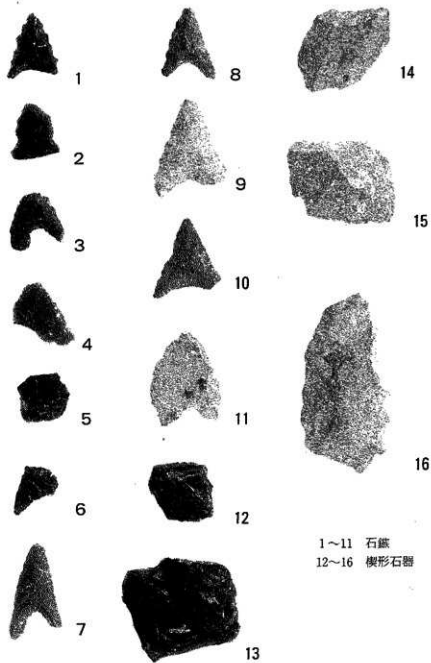
(1) 2区 T-4及びT-4・N拡検出の木杭列

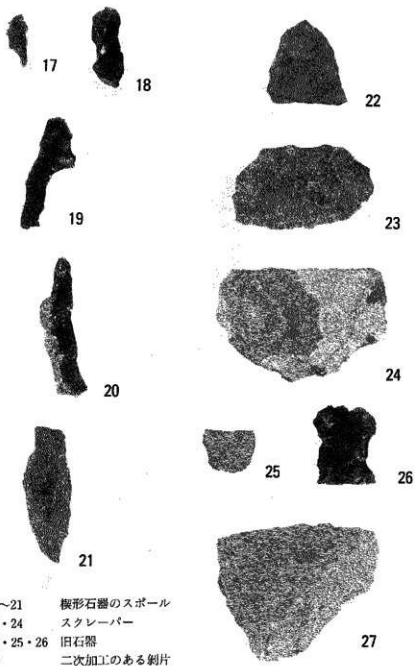


(2) 2区 T-6 (東から)



1 区 出 土 の 土 器



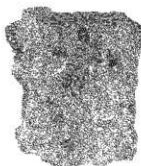




28



32



29



33



30



34



35



31

28~30 二次加工のある剥片
31~35 コア

田 平 遺 跡

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第5集

1981年3月31日

発行 宇土市教育委員会

印刷 廣 下 田 印 刷

